

過去との関係性 変えられる

それぞれの
人生つが
第5部

シニア産業カウンセラー

吉岡 俊介さん (67)



「挫折が挫折でなくなることも。焦らない、くさらない、くだらない、そうすれば、必ず実りの時は来ますよ」と伝えています。話す吉岡俊介さん(大阪市内)

“男性のよろい”脱ぎ、しなやかに

カウンセラーになって気付いたことがある。

「過去の事実は変わらないけれど、過去の意味合いや過去の関係性は変えることができる」

東京で生まれ、子どもの頃は絵や設計図が好きで建築や造船に興味があった。理系の大学を志望していたが、高校2年生の時に父が58歳で他界した。現役で合格を、と文系に進路変更して慶応大法学部に入り、奨学金を受け、アルバイトをしながら学んだ。大手の損害保険会社に就職

でき、社内で最年少の海外駐在員に29歳で抜てきされた。インドネシアに赴任し、妻は日本に戻り、出産。吉岡さんも一時帰国したが、生まれた次女はまもなく亡くなり、妻も心身の調子を崩した。会社から赴任地に戻るか、と聞かれた際にエリートコースから外れ、家族のそばにいたいことを選んだ。

新たに配属されたのは、国内の損害査定などを行う事故

うつ状態になり、質素節約で菓子パンしか食べなかった日も。家のベランダから空を見上げて過ごした。約3カ月たつて、男性であるがゆえに悩む男性たちの集まり「メンズリブ研究会」に参加する。「よろいを脱いで本音を語れる場で、自分が癒やされるきっかけになりました」。

さらに日用雑貨店でアルバイトを始めた妻が「あなたは絵が好きだから描いたらいい」と勧められ、自治体主催の「男女共同参画社会実現のための絵本コンテスト」に

担当だった。慣れない仕事だったが、必死で打ち込んだ。課長になり、社長表彰も受けるなど実績を上げ、一時は約60人の部下を持った。だが、自分を評価してくれた役員や上司が社を去り、後輩が次々と追い越して昇進していく。職場で理不尽とか思えない出来事も加わり、46歳の時、たたきつけるように退職届を出して会社を辞めた。

その日、帰宅して早期退職を家族に告げると、大学受験で浪人中の長女から「自分勝手に会社を辞めた」と責められた。家計を心配していたことだった。吉岡さんは長い間我慢してきた苦しさをこらえきれなくなり、涙がとめどなくあふれ出た。その姿を見て、長女は「もういいよ。お父さん、ずっと家に居てよ」と言いつつ、受け入れてくれた。

後先考えずに辞めたので、

「当時、無計画で辞めたので、収入が激減して、きつかった。『男は泣いてはいけない、努力だ』というのがサラリーマン時代の私の信念、価値観でした。私の場合、あのまま仕事を続けていたら、間違いなく燃え尽きて病気になるっていました。娘の前で涙を流し、救いというか、家族との関係を取り戻すきっかけになりました」と振り返る。

吉岡さんが、妻と共に構想を練って出版社のコンクールに応募して刊行された絵本「なみだ」は、会社人間になつてしまった男性が再生する物語だ。

吉岡さんは、自治体の相談員を長年務めているのをはじめ、2007年に大阪市内に「オフィスよしおか」を開設した。さまざまな悩みを持つ人のカウンセリングを行い、近年はドメスティックバイオレンス(DV) 加害者の男性や、LGBTQ(性的少数者)の人の相談にも乗っている。

会社でいろいろな苦しい経験があったからこそ今の自分があり、仕事で苦労している人の話を受けとめることが出来る。それゆえ、「会社との付き合い方を考えましよう」と助言することが多い。「強い心を持つよりも、しなやかに生きることが大切です。しなやかになれると穏やかになります。ただ、あまり穏やかになると自己主張が出来なくて我慢を強いられるので、したたかに自己主張することも必要です」と、悩んでいる人たちにエールを送る。

（鈴木哲法）
随時掲載します